

令和 4 年 5 月 13 日現在

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02718

研究課題名（和文）高等学校（看護）教育実習における学生の自己評価表の開発に向けて

研究課題名（英文）Development of a self-evaluation table for high school (nursing) practicums

研究代表者

岡 和子 (Oka, Kazuko)

福山平成大学・看護学部・教授

研究者番号：00713794

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：教職課程コアカリキュラムにおける教育実習の目標は学校種や効果について全体のものが示されており、高等学校（看護）教員養成においては教科として独自の評価基準はなく、個々の大学に任されているのが現状である。そのため、本研究では、高等学校（看護）教員として大学卒業までに修得が必要な資質能力の基準作成に向けて、5年一貫（看護）高等学校の管理職を含む教員に調査し、19のカテゴリーと59のサブカテゴリーを抽出した。それを基に教育実習で修得が必要とされる資質能力の基準を作成するため再度調査を行い、ルーブリックによる36項目の評価表を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育実習自己評価表を作成することにより、学生は事前に実習目標を確認し、実習に臨むことができる。教育実習終了後、学生と実習校の教員が評価表に記入することで、実習の成果や課題を確認し、今後の学びや指導に向けて改善を行うことができる。

大学と実習校教員が連携して実習指導に当たり、実習評価についても共同して行うことが求められており、将来の看護科教員を育てるために評価表を用いて共同で指導する意義は深い。学生は、実習後に自己評価を行うことでリフレクションにつながり、学生の時期から自律して学ぶ教師像を身につけることができる。

研究成果の概要（英文）：The goals of educational training in the teacher core curriculum are shown as a whole with regard to school type and effects; in high school (nursing) teacher training, there are no unique evaluation criteria as a subject, and are currently left to each university to decide. Therefore, in the present study, we surveyed teachers, including managers of five-year integrated (nursing) high schools to create standards for qualifications and capabilities that students must acquire by the time they graduate from university as high school (nursing) teachers. As a result, we extracted 19 categories and 59 subcategories. On the basis of these findings, we conducted a survey again in order to create criteria for the necessary qualifications and capabilities to be acquired in teacher training, and created a 36-item evaluation table with rubric.

研究分野：看護教育

キーワード：高等学校（看護） 教育実習 評価基準 ルーブリック

1 研究開始当初の背景

教育実習は大学で学んだ知識、技能を実際の学校現場で実践できる機会でありその果たす役割は大きい。2006年の中央教育審議会答申によると、「教育実習は、学校現場での教育実践を通して、学生自らが教職の適性や進路を考える貴重な機会であり今後とも大きな役割が期待される」とされ、また、大学と実習校の教員が連携して指導に当たり成績評価についても適切な役割分担の下共同して行うことなど改善が求められている。

教員養成課程における学生の資質向上について、2015年の中央教育審議会答申で、教員養成は「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であり、社会・経済のグローバル化や少子・高齢化の進展など、社会情勢の変化にともない、教員が備えるべき不易の資質能力に加えて、自律的に学ぶ姿勢や、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、「チーム学校」の考えの下で、組織的に課題に対応する力などが必要とされた。そのため、教員養成を行う大学では学生の質の向上を図る取り組みがますます求められるようになってきている。2006年に「教職実践演習」が必修化され、教員養成を行う大学では入学時から教員に必要な資質能力を身につけさせるため、到達目標やスタンダードを示している。2017年に教職課程コアカリキュラムが策定され、教育実習についても学校種や教科に共通する目標は示された。しかし、独自の目標は現在までに示されていない。高等学校(看護)教員としての資質能力の基準や教育実習における評価についての文献は現在まで見当たらない。別惣らは、教育実習における実習評価は各大学が実習の目的、内容、評価項目を示すにとどまり、統一された基準がなく、実習校教員により評価のばらつきがあるなどの課題を指摘し大学卒業時に養成すべきスタンダード開発のため全国の小学校教員、管理職、指導主事を対象に調査を行い、スタンダードを作成している。評価基準作成にあたり、既存のものを改訂し、教員経験のある教員から意見を求め、教育実習校の教員に調査を行うなどそれらをもとに作成したものが多く、別惣らが行ったように全国の教員に調査を行い、評価基準を作成したものは見られていない。

2 研究の目的

本研究は、高等学校(看護)の教育実習において学生が目的意識をもって実習に臨むため、まず、高等学校看護教員として大学卒業までに習得すべき資質・能力のスタンダードを作成する。それに基づき教育実習における教員評価表を作成する。同時に学生が使用する自己評価表を作成する。このことにより、教育実習前に学生が実習目標を明確にした上で実習後に自己評価するというシステムを目指すことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)全国の5年一貫高等学校看護科の管理職を含む教員に郵送法によるアンケート調査を行い、結果を整理統合し、カテゴリー、サブカテゴリーを抽出した。サブカテゴリーの項目について再度調査を行い、その結果について因子分析を行った。それと同時に教育実習で修得が必要な資質能力についても調査を行った。

(2)教育実習を受講した学生に教育実習前後の到達度について調査し、Wilcoxon 順位和検定で有意差を求めた。教員の調査と合わせて教育実習で修得が必要とされる資質能力の項目を確定し、ループリックによる評価表を作成した。

4. 研究結果

(1) 第1研究

高等学校(看護)教員として大学卒業までに必要な資質能力を知るため、全国の高等学校看護科の管理職を含む教員に調査を行い、結果をまとめた。類似する内容を抽出し整理・統合を行なった。有効回答数は72人(有効回答率98.6%)、男性15人(20.8%)、女性57人(79.2%)、年齢47.79(SD±10.2)であった。調査での記述を整理・統合し、19のカテゴリーと59のサブカテゴリーが抽出された。

(2) 第2研究

第1研究で抽出されたサブカテゴリーに6項目を追加し、65項目の高等学校(看護)教員として大学卒業までに必要な資質能力の妥当性を検証するため全国の高等学校看護科の管理職を含む教員に5件法による必要度の調査を行い、その結果をもとに因子分析を行い、基準を作成した。分析対象者は116人で男性21人(18.1%)、女性95人(81.9%)、年齢は48.3(SD±9.83)であった。削除検討基準に従い3項目除外し、62項目3因子構造が妥当であると判断した。それぞれの因子は、尺度、13項目【教科指導】、尺度、27項目【生徒指導】、尺度、22項目【教員としての素養】と命名した。尺度全体の係数は0.98であり、尺度から順に $\alpha = .97$ 、 $\alpha = .97$ 、 $\alpha = .92$ で高い信頼性が得られた。

(3) 第3研究

第2研究で確定した大学卒業までに必要な資質能力のうち教育実習で達成が必要とされる資質能力の基準を作成するため、高等学校看護科教員(管理職含む)と教育実習を受講した学生に実習前後に到達度の調査を行い、それらを基に教育実習評価表を作成した。高等学校教員の対象者は第2研究と同じで、学生は12人(男性2人、女性10人)であった。65項目の資質能力のうち、50%以上の教員が「必要である」と回答したのは17項目であり、コアカリキュラムの目標が含まれていると考えられる項目を評価項目の候補とし、学生の教育実習前後の到達度についてWilcoxon 順位和検定で有意差を求めた。有意差のある項目を参考にしながら、高等学校(看護)教育実習において教員と学生が共有できる36項目の評価表をループリックを用いて作成した。作成レベルは4とした。

(4)まとめ

これを活用することにより、文部科学省コアカリキュラムの教育実習の目標と合わせて高等学校(看護)教育実習の目標を確認することが可能になる。しかし、学生の調査は、調査数が少なく信頼性には欠ける面がある。また、この評価表を使用し実習を行っていないため、今後教育実習時に評価表を学生と実習校の教員に実施し、使用後の結果や使いやすさ等について調査する必要がある。

< 引用文献 >

中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」文部科学省，平成 18 年 7 月 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm，2006，(2018.3.21 閲覧)

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieIdfile/2016/01/13/1365896_01.pdf，2015。(2018.7.29 閲覧)

教職課程コアカリキュラムのあり方に関する検討会，2017 年 11 月 17 日，教職課程コアカリキュラム，http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieIdfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf (2018.3.11 閲覧)

別惣淳二，教員養成の質保証に向けた教員養成スタンダードの導入の意義と課題 - 兵庫教育大学の事例をもとに - ，教育学研究，第 80 巻，第 4 号，2013，39-52 .

別惣淳二，渡邊隆信，教員養成スタンダードにもとづく教員の質保証 学生の自己成長を促す全学的学習支援体制の構築，ジアース教育新社，2012 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡 和子, 岡本陽子, 渡邊 満	4. 巻 第22巻
2. 論文標題 高等学校(看護)教員として大学卒業時に必要な資質能力 - 高等学校教員へのアンケート調査より -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 看護学統合研究	6. 最初と最後の頁 23 - 34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡 和子, 岡本陽子, 渡邊 満	4. 巻 第4巻, No.1
2. 論文標題 高校(看護)教員として大学卒業時に必要な資質能力の基準の作成 - 高等学校教員へのアンケート調査から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護・教育・福祉 学研究学会	6. 最初と最後の頁 19 - 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡 和子, 岡本陽子, 渡邊 満	4. 巻 第1巻
2. 論文標題 高等学校(看護)教育実習評価表作成に向けての文献検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福山平成大学看護学部紀要	6. 最初と最後の頁 47 - 56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡和子, 岡本陽子, 渡邊満
2. 発表標題 高等学校教育実習におけるルーブリックによる自己評価表の開発 - 高等学校看護科教員と学生の調査をもとにして -
3. 学会等名 日本看護・教育・福祉学研究学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡和子, 岡本陽子, 渡邊満
2. 発表標題 教育実習（看護）で達成が必要とされる資質能力について高等学校教員の調査から評価表の作成を目指して
3. 学会等名 第41日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡和子, 岡本陽子, 渡邊満
2. 発表標題 教育実習評価についての文献検討
3. 学会等名 全国看護管理・教育・地域ケアシステム学会第14回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡和子, 岡本陽子, 渡邊満
2. 発表標題 5年一貫高等学校「看護」教員として大学卒業時に必要な資質能力の基準-高等学校教員のアンケート調査から-
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡和子, 岡本陽子, 渡邊満
2. 発表標題 高等学校（看護）教員として大学卒業までに必要な資質能力・教育実習（看護）自己評価表の作成に向けて・
3. 学会等名 日本看護研究学会中国・四国地方会 第33回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	岡本 陽子 (Okamoto Yoko) (50425138)	広島文化学園大学・看護学部・教授 (35412)	
研究 分担者	渡邊 満 (Watanabe Michiru) (30127740)	広島文化学園大学・人間健康学部・教授 (35412)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------